

大石恵美 × 松井周 対談

2022.7.12

前編

“ ” で囲まれているのは、『QPQ の地点』に出てくるものの名前。

大石 松井さん、その、

松井 あ、読みました読みました。

大石 あ、ありがとうございます。あ、(脚本を渡して) 一応印刷したやつ。

松井 あ、最後までいってるやつ。

大石 これは最後までいってはないですけど、

松井 あ、いってはないんだ。

大石 あれから書き足してはいます。

松井 全面的に書き足してるってことですか？

大石 いえ、そこから6ページくらい書き足したっていう感じの本になります。

松井 いつからでしたっけ？公演。

大石 公演は8月の4日ですね。っていうような、ペロリンチョして。松井さんも8月の？

松井 え？

大石 松井さんも8月の、

松井 僕は8月のえーっと、

大石 8日？9日？

松井 10日。

大石 あっ見に行きます。

松井 ありがとうございます。

大石 もう本は、

松井 本はもうできてて。白石加代子さんが出て、子供向けのなんですけど。^{*注}

大石 楽しみですですね。楽しみですですね、っていうのもあれですけど。こうね、なかなかね、本当に、(笑)

松井 なんかさ、これ、どういう企み？あのさ、

大石 あ、すいません、どうぞどうぞ。

注：KAAT キッズ・プログラム 2022 『さいごの1つ前』 https://www.kaat.jp/d/saigono_hitotsumae

松井 大石さんって、あれ(映画美学校アクターズ・コース修了)の後俳優はやってるんですか？

大石 いや、やってない。

松井 あ、全然やってないんだ。

大石 全然やって(ない)

松井 やってないんだ。あの修了公演、松田(正隆)さんのやった後。^{*注}

大石 それだけですかね。

注：映画美学校アクターズ・コース第4回公演『石のような水』作：松田正隆(マレビトの会 代表)、演出：松井周

大石 でも元々俳優……あれ、松井さんってあれですっけ。これ何回も言ってあれでしょうけど、元々俳優をやりたくて入ったわけではなかったんですっけ？

松井 あー、青年団ね。いや、俳優やりたかったけど。なんていうのかな、どっちもやりたいというか。劇作・演出もいつかやりたいみたいなのがあって。でも俳優として入って、結局10年くらいはずっと俳優やってたかな。でも書こうと思ってて。書いては、あー無理って言って最後までいかないまま、10年くらいずっと書けなかったみたいな感じですね、最初は。

大石 なんか、チラチラ松井さんのインタビューで読んだりして。可能性が低い方に書くようにしたら、書けるようになった、って。

松井 そうそう。まあ結局さ、現代口語じゃないけど、ずーっとオリザさんの元で「こんにちは」「こんにちは」みたいなことを書きながら、何となくちょっとエピソードを話してく、みたいなそういう自然な流れみたいなのを書いて。どこまでも勿論書けるけど、なんでオリザさんみたいにならないんだろうな？みたいな。ちゃんと実はなんかが起きてる、みたいな。でも多分、それをやってもきっとオリザさんにはなれないし、オリザさんを超えられないとも思ったし。

だから途中で、「こんにちは」「こんにちは」って話してるんだけど、例えば喫茶店だったら、いきなりこの珈琲をぶちまけて、相手に。その後どういう会話が始まるんだろう？みたいな。出来事として、ちょっと確率が低い方向が起きてみて、セリフを考えてくる方が面白いと思って。そうなったら書けるってというか、なんか面白く自分で書けるみたいな感じがあって。そう、確率が低い方、低い方に書いてったみたいな時期はすごいあったかな。

大石 そこを経て。

大石 なんか、私、松井さんの（作品を）飛ばし飛ばしで観てるって感じで。

松井 あ、はいはい。ありがとうございます。

大石 いえいえ、とんでもないです、すいません。すいませんっていうのもあれですけど（笑）。

松井 えっ、なに、なに、なに。俺ダダズを読んできたから、そうそう、色々ノッキングが起きるってというか。スムーズに進める方が難しくなるってというか。

大石 あ、そうですね。それはそうかもしれないです、確かに（笑）。なんかこう、一回ね、松井さんはね、あ、そうそうそう、何もいいんですけど。

松井 何もいいって、何も俺、否定もしてないし、なんでしょう。

大石 ごめんなさい。この対談みたいなのを、一回だけやったことがあって、去年。小野寺ずるさんって分かりますか？

松井 誰？

大石 小野寺ずるさん。

松井 おーおーおー、知ってる知ってる。

大石 小野寺ずるさんが、連載を『えんぶ』に持ってて。で、小野寺ずるさんに呼んでもらって、インタビューしてもらったんですよ。ただそれは、こういうふうに私が場を設けるってわけではなかったの。ずるさん

が進行をしてくれたっていう感じだったんですけど、本当に結構、無茶苦茶じゃないですけど、なんか本当に話が進まなくて。

松井 進まなかったんだ (笑)

大石 で、ずるさんが「これはやばい」って言って、「録り直したいです」みたいに言われたんですよ。

松井 えっ、すごいね。

大石 まあ、録り直さなかったんですけど。

松井 うん。

大石 なんか、その不安はだからすいません、ありますわ。

松井 あるんだ。あ、そういうのあるんだね。

大石 あ、でも結構あの、聞きたいことを、ただ聞きたいことを聞きつつ。その、(脚本を)読んでいただいて、一応これはその、ただそこをそんなに考えずに。

松井 あ、でもその話もしたいですけどね。

大石 あ、本当ですか。ありがとうございます。

大石 えっと、一応広報、広報っていうか、

松井 なに、なに。広報なのね。

大石 広報っていう感じではあるんですけど、でも、松井さんとね、度々会うことがあって、まあ、あの、

松井 あんまり会ってないけどね。

大石 講師で会ったりもして。

松井 ああ、講師ね、うんうん。

大石 そこでね、結構私の中では、あの一、映画美学校に行った意味は結構でかいところがあるんで。

松井 あー。おおおお、そうか。

大石 そうなんです。なので、前々から話したかったな、っていう感じのそこはあるんですよ。

松井 いやいや、こちらこそですよ。

大石 いやいや、本当に。ペロリンチョコ、みたいな。

松井 何その、ルールあるの？そういう、あの、(笑)

大石 ごめんなさいごめんなさい。

松井 いや、いいです (笑)。

大石 そうなんです、ちょっとこの、ね、あの、隙間が

松井 隙間がね、怖い、

大石 そうそうそう、っていうのが結構あるときに、こう、ペロリンチョコって。

松井 え、でもさちょっと待って、大石さんって俺のイメージ、映画美学校の時はすごいなんていうか冷静で、

大石 本当ですか？

松井 うん、ちゃんと周り見えてる人みたいな感じの人だった、俺のイメージ。

大石 すごいカッコつけてた感じ、

松井 あ、カッコつけてたんだ？あそこ。頑張ってたんだ。

大石 なんか、あの修了公演も、結構こう、なんか、空気がすごかったじゃないですか。全員緊張して、

松井 ああ、そうね。そうか。

大石 めっちゃくっちゃ全員緊張してたんですよ。

松井 ああ、そうだ。

大石 本当にね、全員。であの、緊張しすぎて、結構集中的に（私が）松井さんに言われる、みたいな、言われるっていうか、

松井 あったっけ。そうか。

大石 あったんです。その時に、松井さんが演技を見て、私に言ってくれるみたいな、その時、松井さんが喋り出す前から（私が）「はい」「はい」って、なんか、黙ってくれみたいな感じで「はい」「はい」って言ったんですよ。それで、そうなってる状態っていうのに自分でも気づいてて。そうしたら松井さんが、「はいはい、って大石さんいつも言うけど、分かってんのかな？」って。

松井 俺ね、今日ね、その話をしたかった。

大石 その話をしたかったんですか？

松井 いやいや、いや、なんなの、その「はい」を先に言うって。

大石 なんか私は、松井さんが言うことが、もう、なんか分かってたんですよ。多分その時。分かってるつもりっていうか、「あ、これ言われるな」ってその時思ってて、その通りのことを結構（松井さんが）言う、その通りのことを言うって、結構あれですけど。

松井 ああ、なるほど。予想できて、

大石 そうなんです。それで、「もう分かってるから」みたいな。その時に、結構その、多分ね、なんか追い詰められてるところもあったんでしょけど「あのもう、あの、言わんといてくれ」みたいな感じになってました。

松井 へえー、そうか。

大石 松井さんはそれもね、飲み会の時に、「稽古場でははいはいて言ってるけど、大石さんちゃんと分かってんのかな？」って、

松井 言ってた？飲み会でも。

大石 飲み会の時に、「あの、はいはいていうのはさ、一種の防衛本能だと思うんだけど」って（笑）。

松井 たまたまちょうど最近、自分がやってるコミュニティで、『標本室』っていうのがあるんだけど。そこで「はい」っていうのをね、誰よりも早く言っちゃうっていう話が出て。

大石 あ、そうなんですか。それで、今言ったんですか。

松井 そうそうそう。で、ダダルズの人（登場人物）たちも、自意識の回転速度が早いから、何手先も読んで、で、間違っじゃん。何手先も読んで間違っっていう、エネルギーの使い方をしている状態、人が。これやっぱり大石さんなの？と思って。でも今話聞いたら、あ、そうか、その時そうだったんだって思って。それを思い出したっていう感じなんですけど。

大石 確かに、そうですね。そうですね。自分をめちゃくちゃ使って、(脚本を)書いてるところがすごくあって。

松井 へえー。

大石 そうそう、そこもね、松井さんにすごく聞きたくて。ごめんなさいね、ここから自分の話をすると思うんですけど。

松井 いえいえ全然、してして。それが知りたいよ、本当に。

大石 そうですね、最初、“モグアイ”のところか。最初、“モグアイ”のところです。

松井 あー、はいはい。

大石 “グレムリン”のやつ。

松井 うんうん、トレーナーにね。

大石 この文章にも、「あの」とかすごい入ってる感じで。

松井 それが、やっぱりもう完全に、大石さんの普段がそうなるなっていう感じで、

大石 そうですね。

松井 あー、でもその大石さんをあまり見たことないのかもしれないと思って。

大石 今はでも、どうなんですか？

松井 今はでも、ちょっとそんな感じする。

大石 でもこれも、誇張してやってるんだと思います。自分のペースに持っていくためにやってる、みたいなところが。こうやったら「あっこの人テンパってるな」って思って、なんか許されるみたいなところがあったりするから、

松井 あ、そう(笑)。

大石 あるから、やってるかもしれないんですけど。でも、この状態どうなんでしょうね、一人で結構喋らないといけない、みたいな重圧がかかる時。一人で引っ張っていきってなった時、相手の反応を全部拾うと、本当によく分かんなくなるっていうか。ここをある程度みんな遮断してますもんね。

松井 ああ、分かる分かる。そうなのよ、普通みんな、ちょっととりあえずそこは遮断して、言ってきたら答えるくらいにして、みたいなのだと思うんだけど。でもなんか、そうそう、何手先と、周囲の人の意見が違くだろうなっていうのを折り込んで話すと、まあこうなるよね、みたいな。ああなるほど、とは思うかな。

大石 そうですね、確かに。その状態をなんかずっと書いてるな、っていうのは確かにそう。

松井 そうねー。でも、新作を読んで思ったのは、前までは今言ってた、自意識のなんていうのかな、高速回転する人たちのコミュニケーションの困難みたいな話なのかなって。そうまとめられてるとすごくあれかもしれないですけど、

大石 いやいや、全然。

松井 パツとなんとなく、自分の印象としてはそう思ってたんだけど。新作読んだら、全然そこからまた、もっとね、暴力、暴力みたいな感じがしてきた。

大石 なるほど。

松井 人の行動って、なんか小さい、最初の一步はすごい小さいこと、どんな言葉でも、どんな行動も実は暴力だなんていう感じが、すごいこの作品からは感じたっていう。

大石 そうか、実際に松井さんが観てくれたのは『MからSへ』*注1

松井 そうそう、それしか観てなくて。

大石 『おいなりさんラジオ』*注2も聞いていただいて。

松井 そう、聞いた。

大石 ペロリンチョのあれですね。そうか、『MからSへ』は確かにそうですね。でもずっとそれはあります。あ、でも松井さんのを読むときも、結構洗脳する、されるに結局関係があるよ、みたいな。

松井 好きだね、そういうの。

大石 とか、その緊張がいつもある、みたいな感じだと思うんですけど。それともまた違う、人との「加害は」って話になってきてる気はします。

松井 『MからSへ』の時はまだ関係ができない、まだできてないけどなんとか作ろうとして失敗する、みたいなところがあるんだけど。一応今回は関係を持って人たちがいて、その関係が歪んでるんだけど、でもその歪んでるのかどうかは分からないけど、その関係を、なんていうのかな。誇示っていうか、それ（関係）を作っていることを誇るじゃないけど、だからこそ厄介というか。その関係が見ていて、もう。しかもお金、お金っていうのが毎回出てくるんだけど。

大石 そうですね、お金、毎回出てきますね。

松井 お金で結びついてるんだけど、そこでお金だけで結びついてるから純粹ともいえるし、でも逆にそれしかないことになんか、困ってるじゃないけど、うーん。敢えてそれをいいことだって言おうとしてる人と、どんなもんかってなってる人と。なんかその辺の、なんだろうな。もっと嫌な感じになってるなって気がしましたけど（笑）。でも、いや、すごいと思った。読んで、うん。

大石 ほんまですか？

松井 例えばさ、人の発言ってどんなことでも実は暴力的で。例えばなんか、演劇とか観て「年間ベストきました！」とか言って、ある一本の作品を「これ最高でした」って推すっていうことも、それってそれ以外のものに対しては、言ってみればすごい排除する方向じゃないですか。

で、それこそ「アイスコーヒー」って言ってしまう事が、アイスコーヒー以外のものを排除してしまう訳で。そういう話になってくると、それはすごく暴力的だし、誰かのことを好きって言ってしまうこともそうだし。それも全部暴力だなんていう感じが、なんかダダルズを観ると、って言うか読むとそう感じるな。不思議な…だから何もできなくなってくるなっていう感じもする（笑）。

注1：ダダルズ#1『MからSへ』 <https://dadaruzu.site/works/01/>

注2：小ダダルズ#1『おいなりさんラジオ』 <https://dadaruzu.site/works/04/>

大石 あ、でもそうですね。そのテーマが…あっ、これもちょっと聞きたかったんですけど。これ（『QPQの地点』）が長編の3作目なんですけど、結構テーマをバーンって言っちゃってるなと思って。直接的な言葉

がめちゃくちゃ出てきたりとか、最後に“女”、あれですね、最初からいるひとですね。長ゼリフがあったと思うんですけど。(脚本を見て) あっこれですね、ここの、このゼリフが。これもね、私(直接的すぎるとか)何も考えずに書いてるんで。で、なんか「このゼリフは使えるじゃないか？」っていうのをメモして、

松井 あっそうなんだ。そうだね。

大石 でも多分、先回りしてるっていう。さっき松井さんが言ってくれた、ダダルズの人物は自意識が先行してる、あれも、自分が言った事が、相手にどう影響するか、これは暴力なんじゃないかと思ってるのに、人を傷つけることをやっちゃう人たちの、一応そのコミュニケーションを描くみたいなことで、暴力が潜んでいたと思うんですけど、これは、すごい直接暴力を言ってるゼリフが出ちゃったなーと思って。

松井 確かに。

大石 それがなんか、自分でも分からないんですけど。

松井 ああそうか。自分ではそれがいい、悪いかはどういう感じなんですか？

大石 それが判定できなくて、でも書きちゃってるなーとは思ったんです。まあでも、そういうものか、みたいな感じに(自分のなかで)おさめてるんですけど。結構松井さんのやつを読んでも、その最初の形がどういものか分からないんですけど、舞台の設定とかも書いてあったりして。

あと、その作品ごとに結構ゼリフとかも使い分けてる印象が。「こういう作品だから、この文」みたいな。あれっていうのは、最初からこういう作品にしよう、っていうのが(ある)？

松井 そうね。ゼリフまでそうしてるか分かんないけど、どういう世界の話かは結構決めてるかもな。世界観か。近未来で、例えばなんか、性交は禁止で、とか。あと、そうだね。そういうルールみたいな、社会の中でこういうルールですっていうのは決めてるかもな。

大石 じゃあ、結構設定の方は決めてるけど、

松井 あんまりゼリフ……例えばお金持ちの家の人の話みたいにした時は、お金持ちの家の人が喋るだろう言葉を使ったりしたことはあるけど。あんまりそこまで、ゼリフで考えてはいないかなっていう気もする。でもあんまり性格とかは考えたことない。

この前誰かと話してたんだけど、キャラクターの性格とか、感情とかあまり考えないっていうか。だから絶対大石さんもそんな感じがするんだけど。キャラクターって、ほらよくいるじゃん、登場人物として優しい、とか頼りになる、とか喧嘩っ早い、とか。分かんないけど、それはすごい単純だけど(笑)。その登場人物の性格づけとか、全然考えたことないな。感情とかね。

大石 私は、でもどうなんやろう？

松井 なんか考えてます？設定は。

大石 設定は……(『QPQの地点』は)この人が、こういう場、ワークショップを、全然準備ができてないのに始める、という。

松井 最高の始まり方なんじゃない？大体まずワークショップってさ、なんなの？って思うじゃん。なんかよくわかんない、ホワイトボードがあって先生っぽく立って、それを聞いている人がいるっていう。なんでその演

技始めなきゃいけないの？っていう。

大石 本当不思議ですよ。

松井 「さ、始めます」っていうけど、何を始めるんだっけ？っていう。そういう感じの始まり方は大好きですね。

大石 あれ、本当面白いですよ。これ、でも本当不思議な話、演出家やと、自分が喋らないとなかなか場がならないみたいな。そうじゃないふうになるときもあるんですけど、稽古場でみんなが喋ってて、良い時間だなってときもあるんですけど、でもなんか困ったな、煮詰まったなっていうとき、別にみんな顔は向けてないけど、

松井 あ、分かる。意識向けるよね。

大石 私分からんねんけどな、っていうふうには言えないというか。とりあえずなんか絞り出して。

松井 分かる分かる。

大石 全員分かってないんですよ。私も何言ってるか分からないし、全員何言ってるか分かんないし。とりあえず言葉だけがあるみたいな状態の追い詰められ方が本当に不思議で。

松井 あれ俺大好きだよ。自分が演出家の時に、みんな分かってないな—っていう時に（脚本を持って）こうやってもう一回、全然読んでもいないのに「え—っ、そうっすね、え—っ、そっかそっか」みたいなことを言ってるのは、全然面白い。

大石 あっ、それ楽しめるんですか。

松井 楽しめる。何にもないんだけどね。

大石 おそろしい話です、ほんまに。でもそれ気づいてる人いるんですか？松井さん今楽しんでるな、みたいな。

松井 いや分かんない、でも俺はそれはネタとして楽しんでるけど、（分かって）いるのかな？でもあれ、よくいるじゃん。俳優とかでも、フィードバックとかしてる時とかも、「はい」とか言いながらも（脚本を持って）「あ—っ」って、なんかやってるつづりをさ、出す人っていうか。でもそんなもんだよな、とは思うんだよな。

大石 確かに確かに。そうですね。そこででも、その状況になると結構私は、

松井 あっ、ヤバい？

大石 言ったりするんですよ。「今、本当に誰も何も考えてないと思うんですけど」みたいに言った時に、笑ってくれたらいいんですけど、本当に「え？」みたいな。

松井 考えてないの、本当に？みたいに。

大石 それ言う？みたいにやられると、本当にもう、泣きそうになるっていうか。

松井 いや、だから、全部それ、その感じ（脚本に）すごい出てるけどね。

松井 だから、ワークショップも、最初なんでこの人いきなり講師っぽく振る舞うのかな？とか、生徒側が、まあ生徒としてっていうか、受ける参加者としていんだけど。いきなり役割を演じ始めなきゃいけない、とか。俺もね、例えばホワイトボードに何か書き出す、書き出した時にみんなちょっとメモを取ろうとかするじ

やん。その時にすぐ消したくなるのね。なんていうんだろう。その、振り子なんだよね。いや、何かあるってここに思ってるんだろうけど。何もないから！っていう。その感じは、俺大石さんと近いところは何かある。言ってしまうたり、書いてしまったことに対して、それがなんか確定されることとか、それが一つの方向に進むことになんかやっぱり、ちょっと躊躇するとか。その逆を言いたくなるとか、したくなるみたいな感じ。それはなんかすごい面白いっていうか、人間、なんつーんだろう、人間誰しもこういうところがあるだろうなっていうのをよくここまで掬うな、っていうか。掬い取るなっていう感じがしてますね。

大石 ちょっと話が変わるんですけど、松井さんの、さっき可能性が低い方向に書くっておっしゃってたんですけど、松井さんの脚本、人物の行動が飛ぶなーっていうふうに思う時があって。例えば『自慢の息子』（サンプル：07／作・演出：松井周）の時に、多分 A4 の紙の 2 段に収まるくらいの短い時間のやり取りなんですけど、3 回転くらい人物の関係性がひっくり返って、びっくりしたんですよ。松井さんは結構それがあるんですけど、この前提でこう乗ってたら、急にハシゴ外されて、あっここに人物おったんや？って感じのが。

松井 そうね。それこそ確率の低い方向に行く。まずは現実はこちらだろうって、そう思い込んで、その思い込みを外していくっていう感じの。要するに確率の低い方向に、っていう感じなんだよね。なんでそれをやるかは、

大石 わからない？

松井 いやー、えーっと、ぶっちゃけ言うと、人間ってそんな、なんていうかな、ほとんど思い込みで現実を生きてるっていう感じがあるから。日常がね。その思い込みっていうものを外すことも、なんていうのかな、現実っていうか、別の現実にも多分直面できるし、そっちの方がまあ面白いと思えるけど、でもそれも実は思い込みで、っていうことも、その何重にも思い込みが重なってできてるのが現実なんで。だからどっちかというともそれも現実として考えてるんだよね。思い込みの連続、レイヤーが。

大石 それは、別に物語を展開させるためとかじゃなく、もう、そういうもんだから、っていう。

松井 そうそうそうそう。

大石 なるほど。でも、確かに、舞台上、なんであれが成立するんやろう？って。まあ俳優の人がすごいっていうのもあるかもしれないんですけど、あと結構舞台のセットとかもいくらでも変容するとか。

松井 ああ、そうだね。

大石 そこ（舞台セット）で、コンセプトじゃないですけど、どのように世界を捉えてるのかっていうのが最初から目で分かるみたいなものもあるし。松井さんが言う、いろんな物語も脱ぎ着して、脱ぎ着しての連続だから、っていうのもあるんですけど、松井さんは、「あれ」を、「現実だ」みたいな、確信みたいなものがあるってことなんですかね。

松井 それは多分、そこは物とか身体に頼るっていうか。例えば、ぬいぐるみだと思ってぬいぐるみを抱く感じと、実はおばあちゃんだったっていうことにして、おばあちゃんに膝枕をしてもらった、っていうこととの感じ。そうやって、ぬいぐるみでありおばあちゃんであることを両立させる。でもそれは俳優のアプローチの仕方が全然変わるので、で、それを利用するっていうか。

でも、お客さんには、前のそのぬいぐるみの状態、「あっこれぬいぐるみなんだな」ってしか思えないから、

この人がおかしくなったっていうふうに見えるかもしれないけど、それを繰り返していけば、ちょっとまた変わってくるっていうか。だからこれは刷り込みなんです。ただの可愛いぬいぐるみって思ってることも。お客さんがね。だから、ちょっと時間が経てば変わるから、っていうね。あとは俳優の接し方で変わるかなっていう。そう、俳優に求めることが無茶なことが多い。例えば、暑かったのに一瞬後には寒いっていうことをちゃんと身体でできてほしい、とか、そういう無茶振りはあるかな。

大石 なるほど。

松井 そうそう、そういう、物を使って俳優のアプローチを変える、物は変わらないんだけど、俳優のアプローチの仕方になんとか変わってみせるってというような形。これ絶対映画とかじゃ難しいだろうなっていう。やっぱそこに光とか、なんかちょっとテイストが変わる何かがないと。

大石 うんうんうんうん、そうですね。だからもう常に、足場がグラグラする、

松井 そうそうそうそう。させたい。岸田國士かな？が、『父帰る』（菊池寛）*注っていう戯曲があって、それを観てすごい泣いたっていう話があって。批評、感想みたいなものを書いてあるんだけど。多分その家に、今まで不在だった父がね、何十年ぶりに帰ってきて、その息子が、父に辛く当たりながらも、まあ迎え入れるみたいな話だったのかな。で、そこでワーッと泣いたって話で。

でも岸田國士は途中で、「でもこれはただの常識的感動である」っていうふうに書いてて。そうやって泣かせてしまうことに、この作品の芸術的価値が下がってしまっているって書いてて、あー、なるほどってすごい思った。そのままそういうふうに、親子の愛とか情みたいな物に流されていくことを自然だと思わせてしまうことは、ワーッとみんな盛り上がるかもしれないけど、実は僕もちょっとゾツとするっていうか。暴力的な感じっていうのかな。そういうのはなんか漂うな、っていうのはあって。だからそこをどっか崩すようにしないと、それに乗っちゃいそうになる、みたいな。感じっていうのかな。それはちょっと感じてるというか、考えてるっていうのはありますね。作る時。

大石 うんうん。

松井 そうそう。

（沈黙）

松井 今はちょっと俺も考えてないですけど。

全員 （笑）。

松井 でもなんか、考えるきっかけをもらおうとはしています。

注：「演劇新潮 第一号第四号」／「岸田國士全集 19」岩波書店より

後編につづく

2022.7.12 渋谷のある喫茶店にて

協力：竹内里紗 反訳：浅田麻衣・泉田圭輔 構成：浅田麻衣、大石恵美